

[東洋の古代美術展によせて]

## 韓国に仏像の華麗なる懸裳を追って

3月の末、娘の春休みを狙って、一週間、仏像調査のために、韓国に滞在しました。

思えば、私の仏像の勉強は、多くの場合、夫と逞しく成長した娘の理解の上に成り立っています。また、友達や両親等の良き理解の下に今の私があるという思いを強くいたします。ともかく、今度も、このような殊勝な感謝の気持ちを抱きながら、韓国の中央博物館を訪れました。

同館の所蔵する慶尚北道榮州郡順興面内竹里、宿水寺址から出土した一括二十六点の仏像と、他に4点の仏像を特別に拝見させていただくのが目的です。宿水寺は、慶州の竹嶺を北に越えた僻遠の地にあり、統一新羅時代創建の名刹として聞こえていました。高麗時代後半に蒙古兵の大挙侵入により廃滅した(「宿水寺址出土の仏像について」金載元 美術研究200号 昭和33年)と言われています。この寺址より、1953年の地均らし工事中に発見された小金銅仏群は、その後の調査により、三国時代から統一新羅時代までのものと判明し、銘文こそありませんが、出土地の明確な重要な仏像として脚光を浴びるようになりました。

この中に、日本の仏像との関係

で私が今関心を抱いている「懸裳」を備えた仏像があります。そして、更に、拝見したその他の4点の仏像の内2点も「懸裳」を持っています。

今日は、これらの仏像を中心に、わが国最初の止利式仏像に見える懸裳それ故に衣裳彫刻の仏像とさえ言われる華やかな法衣が韓国・中国を西行して遥かガンダーラにまで行くつとという、将にシルクロードを経由した「東洋の古代美術」の一断面をお話ししようと思えます。

韓国の仏像を調べる内に、私は、三国時代から統一新羅にかけての坐像の殆んどが懸裳を伴っているということに気づきました。その最初のもは平安南道平原郡元五里廢寺から出土した泥像群中の如来坐像です(図1)。総高15センチの本像は、膝辺りの表現が省略されているために、短軀の立像のよえに見えますが、坐像と解釈されています。童形の誠に愛らしいお顔に、短い衣が調和しているとも言えます。裳裾は本の少し蓮華の台座にかかっているだけの、懸裳の萌芽を示しています。高句麗のものです。出土地は分りませんが同じ高句麗とされている金銅如来坐像(図2)は、服装も変わって、

胸前を広く開けた通肩で、隋分と発達した懸裳を見せえています。右足を出して、特に、衣端に房飾りを施した魚の鱗状の形を表わしている点は重要です。この房飾りは、わが国の懸裳には伝わりませんでした、中国にはあります。

もう一つ、注目すべき高句麗の作品があります。古くに中国吉林省琿春県半拉城より出土した石造の二仏並坐像(図3)です。高句麗本国から離れた出土地であるせいか、非常にユニークな要素を多々備えています。開いた胸にのぞかせる着物の襟のような形は、わが国では唯一飛鳥寺本尊にのみ現われています。飛鳥寺本尊では更に、胸に紐を結んでいます。図3の像の懸裳は、長く伸びたU字形を正面に垂らして、その両側にΩ字形衣文の変形を備えたもので、この構成要素は、先程の図2の像にも通ずるものであり、わが国止利式仏像の典型・法隆寺金堂釈迦如来像にも通じます。特に、重ねられた一番下の衣の一部分をU字形三ヶ所に表わす手法は釈迦如来像と同じです。顔の輪郭も似ています。この像と釈迦像の懸裳の源は、中国四川省の梁時代の仏像に求められると私は考えます。先程の衣端の房飾りも実は四川省の同じ梁時代の仏像にあるのです。

懸裳が如来像のみに特有のものであるらしいということをお断りして置かなければなりません。交脚形の菩薩像は除いて置きます。ここで問題にしているのは、結跏趺坐(両脚組み合わせ)の如来像



図6 石造如来坐像  
蓮洞里 百濟

です。

次に、韓国の百濟において同様な禪定印(両手腹前組み合わせ。釈迦の瞑想のポーズ。)を取る懸裳形式の仏像があります(図4)。通肩の襟はU字形に低く下りますが、胸元に下着の僧祇支を表わしていないようです。足を見せないで大らかなU字形を三つ並べる(両脇では変形)懸裳の形式で、この三部構成は図2とも基本的に同じです。ここでは、それを二段に重ねています。蠟石製の大きな作風には小像ながら大像の趣きがあります。この懸裳も法隆寺釈迦像に行きつくと私は見えています。

同じく石造で、百濟の風を漂わせる図5は、米国にあるものですが、懸裳の異ったタイプを示しています。足を見せて、脚より下りる衣褶はU字形とせず、全て細かい皺で表わします。これも実は中国の龍門に原形があるもので、韓国には他に見かけません。

百濟の全羅南道益山郡蓮洞里石造如来像(図6)。ここに再び、U字形懸裳の変形が見られ、U字形が、中国を更に逆上り、ガンダーラ(図7)までたどり着くことに感動を覚えます。布の流れによって自然に生じる形には違いありませんが、それを一つの形式として、捨て去ることなく、アレンジし、洗練させて行く過程に心引かれます。そこに美を感じとった人々の心を見ます。

さて、古新羅の仏像はどうでしょうか?ここにもちゃんと懸裳は

図1 泥造如来坐像  
高句麗



図2 金銅如来坐像  
高句麗



図3 石造二仏並坐像  
吉林省出土 高句麗



図4 蠟石製如来坐像  
百濟



図5 石造如来坐像





図7 ストゥッコ製如来坐像  
ガンダーラ・タキシラ



図8 石造如来坐像  
南山仏谷 古新羅



図9 石造如来坐像  
元南山仁旺里 古新羅

ったのです。南山仏谷の石造像(図8)。龕内の仏像として、雨露にさらされながら、軽やかな線刻の衣端を表わし、これは今までのものと異なって、わが国で言えば法輪寺の飛鳥時代の木造如来坐像に近づいています。第三のパターンと言えましょう。

同じ南山の仁旺里から出て、今は慶州の博物館に所蔵されている石造如来坐像(図9)は、胸前にU字形に垂らした衣がわが国法隆寺釈迦像と共通し、その下の、円形台座の正面に縦の衣褶による懸裳を表現しています。

そして、この古新羅の最後に、宿水寺の金銅如来坐像(図10)を挙げなければなりません。私が、(白手袋で隔てながらも)、手に取って拝見することの出来た、しかも、約束の日から三日も待たされて、遂に目前にすることのできた懐しい仏像です。高さは僅かに15センチ(丸顔で、厳しい鼻陵と眉に入った鬘線が印象的です。着衣方法には少し混同があるようですが、右の二の腕や、背中左端、正面の衣端には線刻唐草文様の中に千年余も経た鍍金の輝きが見えて驚かれます。そして、ここに再び、形は変形して、ずっと自然になっていますが、あの三部構成の懸裳があります。この像のために、宿水寺仏像の調査を願い出たとも云えます。私の思い入れの深いスケッチを皆さんに紹介しましょう(図11)。

仏像はガンダーラに始まり、そ

の地で既に懸裳の萌芽は現われました(図7)。私は今、ガンダーラからわが国に至る懸裳の系譜を模索中(「月刊文化財」平成元年6月号より、8月号、12月号、平成2年4月号に連載中)ですが、知れば知る程、ガンダーラの仏像は、仏像の基本の全てを生み出し、わが国にまで伝えたという思いが強くなります。

そして、今回、私一人の願いのために、韓国中央博物館の姜美術部長以下の方々が動いて下さったという感謝の気持ちが強くなります。(村田靖子)

図10 銅造如来坐像  
宿水寺址出土 新羅統一前後



図11 同スケッチ

